

開 目 抄

摂受・折伏と申す法門は、水火のごとし。火は水をいとう、水は火をにくむ。摂受の者は折伏をわらう、折伏の者は摂受をかなしむ。無智・悪人の国土に充満の時は摂受を前とす、安樂行品のごとし。邪智・謗法の者の多き時は折伏を前とす、常不輕品のごとし。 (御書 575 頁)

【通釈】

摂受・折伏という法門は、水と火のごとくである。火は水を嫌い、水は火を憎む。摂受を行ずる者は折伏を笑い、折伏を行ずる者は摂受を悲しむ。無智の者、悪人が国土に充満している時は摂受をもって法を弘める。安樂行品に説かれている通りである。邪智の者、謗法の者が多い時は、折伏をもって法を弘める。常不輕品に説かれている通りである。

【主な語句の解説】

- ① 無智→仏法に対する智慧のないこと。
- ② 安樂行品→文殊菩薩が悪世に法華經を安樂に修行する方法を問うたのに対して、釈尊は身・口・意・誓願の四安樂行を説き、初心の菩薩の修行法を示している。
- ③ 邪智→仏法の浅深・勝劣をわきまえず、正法を乱すよこしまな智慧。
- ④ 常不輕品→常不輕菩薩の菩薩行を示して、法華經の行者を謗る者の罪報と、護持する者の功德が説かれている。

【背景と大意】

本抄は、文永九（1272）年二月、大聖人五十一歳の御時、佐渡の塚原三昧堂で著されました。本抄は一往、四条金吾頼基に与えられた御書ですが、再往は門下全般に与えられたもので、上下二巻からなります。題号は、大聖人御自身によるものであり、『開目抄』の「開目」とは、仏法に無智な一切衆生の盲目を開く意味です。本抄は、「法本尊開顕の書」である『観心本尊抄』に対して、「人本尊開顕の書」であり、御書五大部の一つに数えられる重要書です。本抄の内容は、上巻は五重相對をもって、外道乃至釈尊一代の諸經の勝劣浅深を判じ、下巻は大聖人こそ主師親の三徳兼備の仏であることを明かされています。本文は下巻の後半部分に当たっており、摂受・折伏の弘教方法を挙げられ、邪智・謗法の者の多い末法においては、破邪顯正の折伏をもって法を弘めていくことを教えられています。

【参考御書並御指南】

『佐渡御書』「仏法は摂受・折伏時によるべし」 (御書五七八)

『法華經不輕品』「我深く汝等を敬う。敢えて輕慢せず。所以は何ん、汝等皆菩薩の道を行じて、当に作仏することを得べし（私はあなた方を敬います。決して輕んじません。あなた方は菩薩道を修行して必ず仏になるからです）」 (法華經五〇〇)

『日如上人御指南』「我々が折伏をしていく中で様々な難に遭うことによって、過去世からの罪障を消滅しているのです。これが法華經の『不輕品』に説かれる不輕菩薩の折伏の姿です。『あの人にこんなことを言ったらたいへんなことになってしまう』と、難を恐れて折伏をしないというのが一番よくないのです。そこで御題目をしっかりと唱えていくと、勇気が湧いてくるのです。そういう意味からも、しっかりと御題目を唱えていくことが大切なのです。もちろん、朝夕の勤行もしっかりとしなければだめです。そうすれば、きちんと勇気が湧いてくるのであります。大聖人様は『御義口伝』に、『末法に於て今日蓮等の類の修行は、妙法蓮華經を修行するに難來たるを以て安樂と意得べきなり』（御書一七六二）と御指南あそばされています。そういう意味からも、これから先の闘いにおいては老若男女を問わず、一人ひとりが折伏に精進をしていていただきたいと思います」（折伏要文160）

『日如上人御指南』「大聖人様は諸御書において、法華經の敵を見ておいて責めもせず、折伏をしない者、それは涅槃經で言う『慈無くして詐り親しむ』者であり、『仏法中怨』の者すなわち、仏法の中の怨であると断じているのであります。しかし、これほどまでに大聖人様が折伏をしない者に対して厳しく仰せられているのは、逆説的に言えば、折伏を行ずる者の功德がいかにか大きいかをお示しあそばされているのにほかならないのであります（中略）今ここで最も大事なことは、折伏の功德がいかにか大きいかを頭でいくら理解しても詮ないことで、さらに一歩進んで、理屈ではなく、我々自身の折伏の実践から、その功德を体験していくことが、最も肝要なのであります」（大日蓮・平成三〇年五月号）